

琉球大学学術リポジトリ

島嶼におけるフィリピン女性たちのネットワークとリーダーシップ：徳之島，宮古島，石垣島の比較

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2020-03-02 キーワード (Ja): フィリピン女性, 島嶼, 徳之島, 沖縄, ネットワーク キーワード (En): Pilipino women, Islands, Tokunoshima, Okinawa, Network 作成者: 野入, 直美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45305

島嶼におけるフィリピン女性たちのネットワークとリーダーシップ ——徳之島，宮古島，石垣島の比較——

野入直美

- I. 島嶼フィリピン女性の比較研究
- II. 明確なグループとリーダーの不在——徳之島の特徴
- III. 結びに代えて——島嶼のフィリピン女性たち

キーワード：フィリピン女性，島嶼，徳之島，沖縄，ネットワーク

I. 島嶼フィリピン女性の比較研究¹⁾

1. 比較の着眼

徳之島に在住するフィリピン結婚移民のネットワークの特徴は、フォーマル・グループ、インフォーマル・グループが両方とも、ほとんどまったく編まれていないことである。それに伴って、リーダーシップもきわめて緩やかな形で存在している。集まりの声かけをする人はいるが、グループを束ねるリーダーとして選ばれたり、フィリピン女性の代表者として外部の人びとと協働や交渉をしたりすることはない。徳之島のフィリピン女性たちの特徴は、メンバーシップのはっきりしたグループや定まったリーダーがない状態で緩やかに集い、つながり合っていることである。この章では、宮古島、石垣島との比較を通じて、徳之島におけるフィリピン女性たちの、グループとリーダーをもたないユニークな集い方の特徴を明らかにしていく。

筆者は、共同研究によって島嶼に在住するフィリピン女性たちの調査を行ってきた。石垣島では2013年に、宮古島では2014年にアンケート調査とインタビュー調査を実施した²⁾。徳之島では2016年に予備調査を、2018年に本調査を行った。以下は、そこで得られたデータを、ネットワークとリーダーシップに着目して整理し、分析を試みる。

2018年の徳之島調査は、島内のフィリピン女性たちに集いの声かけをするひとりの女性、Aさんに協力をお願いし、Aさんの企画で日曜日にビーチでバーベキューをしてもらって、参加者の皆さんにアンケートへの協力をお願いした。また、Aさんを含めて三人のフィリピン女性にインタビューを行い、伊仙町役場を訪問して子育て支援施策についてのお話をうかがった。これに先立って2016年には、やはりバーベキューの集いを開いてもらってフィリピン女性の皆さんと顔合わせをし、予備調査を行った。また、徳之島町役場とフィリピン女性が介護職として就労している施設を訪ね、関係者からの聞き取りを行った。

2. 石垣島におけるフィリピン・ネットワークの特徴

石垣島は人口約5万人、現住するフィリピン人は55名である(2017年12月現在)³⁾。沖縄県先島地域に位置する島嶼である。戦前からパイナップル栽培と缶詰加工を行う台湾人実業家と農民らが移住してきており、1972年の沖縄の本土復帰前に、ほとんどの台湾系住民は日本国籍を取得したが、それでも外国人登録者数においては「中国」が最多となってきた。外国人登録者数においてフィリピンが中国を上回ったのは、1996年である。フィリピン人の登録者数は、2003年の65人がピークで、緩やかに減少し、近年は50人前後で推移している。その圧倒的多数は女性である。

2013年に実施したアンケート調査では、回収16枚、うちタガログ語12枚、英語3枚、日本語2枚(複数言語混合2枚)であった。世代としては50代と30代が各2名で、40代10名、20代が1名であった。初来日は、1980年代が5名、90年代が6名、2000年以降が1名であった。初来日の経緯は、仕事11人(うちエンターテイナー10人)、結婚4人、観光1人であった。

現職があるという回答は11名で、調理、ヘルパー、ウェイトレス、ビル管理、海産物生産自営、ホテルベッドメイキングなどであった。居住地としては、市街地(登野城、大川、石垣、新川その他)が14名、石垣島北部2名であった。石垣島では、通称「四ケ字」と言われている中心的な市街地へのフィリピン女性たちの集中の度合いが、88%と高かった。石垣市の総人口では62%である。

以上から見えてくる石垣島のフィリピン女性の標準的なプロフィールは、40代半ばで、乳幼児子育てを終えてパート就労が多く、直接に石垣島に渡航してきた人はほぼゼロで、フィリピン→本土で就労・配偶者となる男性との出会い→フィリピンでの婚姻・ビザ手続き→本土または石垣島への移住という経路が標準的であった。もともとエンターテイナーとしてフィリピン・本土の複数回往復をした人が多く、石垣島にあったフィリピンパブで働いたことのある人もいたが、エンターテイナーとしての就労は完全に過去のこととなっている。

石垣島のフィリピン人女性たちは、徳之島、宮古島と比較すると、最も安定的にフォーマル・グループを編成してきた。

代表的なフォーマル・グループは、カトリック教会の信徒グループとして、礼拝堂の清掃や日曜礼拝の準備、モーニングサービス(礼拝後の歓談の集い)用の軽食の準備などをまわりもちで行う組、「カイビガン」である。カイビガンは2003年に設けられ、地元信徒たちとの相互行為、すなわち他者関係を含んで活動してきた。カイビガンのリーダーは、フィリピン女性信徒たちを束ねるだけでなく、カトリック教会の他の中心的な信徒たちと協働し、教会の運営にも携わってきている。

石垣島の特徴は、このフォーマル・グループと絶妙なバランスをとりながら、いくつものインフォーマルな集いが持たれていることである。インフォーマルな集いは、マリア像が信徒の家庭を巡回し、フィリピン女性たちが家庭礼拝をしてフィリピン料理を囲んで歓談する「ロザリオ」や、数千円を出し合ってまわりもちで融資をし、集いと飲食を楽しむ「模合」、カトリック教会に隣接する幼稚園・小学校の母親どうしのつながりなどであり、それらが幾重にもネットワークを織り成している。数名のリーダーたちは、お互いの長所を活かし、緩やかにそれらを束ねてきた。

このようなネットワークとリーダーシップの背景には、リーダーたちの献身やフィリピン女性たちの協力があつた。さらに、フィリピンと沖縄の両方にルーツをもつひとりのシスターが、石垣島に赴任中、フィリピン女性信徒たちの組織化に積極的に取り組んできた。また、教会の信徒組織の中核にいて、カトリック学校の管理職にも就いていたひとりの地元女性が、英語ミサの導入などを推進し、フィリピン女性と地元信徒をつないできた。石垣島のフィリピン人ネットワークは、カトリック教会関係者による積極的なコミットメントが効果を及ぼしてきた事例であるといえるだろう。視点を変えてみれば、石垣島において、フィリピン女性たちの組織化は、教会とカトリック信仰が関わる領域ではほぼ完結している。地域社会においては、大きな災害時の募金活動などを除くと、フィリピン女性たちの集いの様子はほぼ不可視である。

3. 宮古島におけるフィリピン・ネットワークの特徴

宮古島は、人口約5万4千人、フィリピン人は石垣島よりもやや多く、宮古島市85名、宮古郡多良間村が15名、合計100名である。2014年に実施したアンケート調査では、対象者12名のうち40代6名、50代4名、30・60代1名ずつであった。石垣島では中心市街地にほとんどのフィリピン女性が集中していたのに対し、宮古島は郊外と離島にもフィリピン女性が在住していた。そのため、宮古島の調査フィールドは、宮古島本島を中心としつつ、周辺離島を含めている。アンケート結果の回答者は、宮古島8名、離島が4名であった。初来日は、90年代が5名、80年代と2000年代が3名ずつで、70年代という人が1名いた。いわゆる興行ビザで来日した人は7名で、宮古島の店で働いていた人が多い。結婚移民5名のうち、4名までが他のフィリピン女性による紹介結婚であり、結婚を介したチェーン・マイグレーションが見いだされた。

宮古島におけるフィリピン女性たちの集いは、数名のフィリピン人シスターを中心とする「教会模合」と「マブハイ・ダンスグループ」のふたつがある。どちらにもリーダーとメンバーがいて、教会への献金やダンスの披露を介して外部とつながっている。しかし、石垣島におけるカイビガンのような、他者との相互行為はあまり行われていない。どちら

かと言えばインフォーマル・グループに類するものだと言えるだろう。

教会模合は、2013年から始まったもので、月に一度、フィリピン人シスターたちが起居する修道院にフィリピン女性たちが集い、シスターの導きで祈りを共にしたのちに、フィリピン料理を囲む歓談をする。各自が定額を出し合って持ち回りで融資するしくみは通常の模合と同じであるが、金額の割が教会に寄付されることと、集いの最初にシスターの導きによる祈りのひとときがもたれることが特徴的である。

マブハイ・ダンスグループは、2008年に、ひとりのフィリピン女性リーダーによって編成されたもので、ダンスを披露するための定期的な練習が行われる。披露の場は、集落で行われる祭りや敬老会、宮古島の演芸イベントやフィリピン台風被害時のチャリティーイベントである。

宮古島におけるフィリピン女性たちは、日曜礼拝よりはフィリピン人シスターを囲んでの教会模合によく参集しており、地元信徒との関係は石垣島よりも希薄である。一方で、宮古島では、婦人会で役員を務める地元の有力女性が、前職である学校教員としてフィリピン女性の母親たちと関わった経緯があり、この女性が婦人会活動にフィリピン女性たちの関与を促してきた。その結果、宮古島のフィリピン女性たちの集いは、カトリック教会の内部においては石垣島よりも地元信徒との関係性が希薄であるが、地域社会においては可視性が相対的に高い。

リーダーシップは、教会との連絡役と、マブハイ・ダンスグループの代表の二人リーダー体制が5年ほど続いたが、そのうち一人の島外への移動がひとつの契機となり、リーダー持ち回り制となった。2018年の教会模合におけるミーティングで、今後はひとりのリーダーを置くことが、フィリピン女性たちの話し合いによって定められた。宮古島の特徴は、フィリピン人シスターたちのサポートのもとで、合議による選出でリーダーが定まり、マブハイ・ダンスグループを中心に、活動内容のある集いが持たれていることである。

II. 明確なグループとリーダーの不在——徳之島の特徴

1. 徳之島調査結果の概要

鹿児島県大島郡に位置する徳之島は、徳之島町、天城町、伊仙町から成っている。人口はそれぞれ約1万人、6千人、7千人、合計でおよそ2万3千人の島嶼である。フィリピン人人口はそれぞれ35人、30人、19人で、合計84人であった。石垣島は人口約5万人の島にフィリピン人55人、宮古島は人口約5万4千人の島々にフィリピン人100人、徳之島は人口2万3千人の島にフィリピン人84人であり、人口あたりでは徳之島が最多である。

徳之島では2018年にアンケート調査とインタビュー調査を実施した。14人の回答者の

うち、20代1名、30代2名、40代2名、50代8名、60代3名であった。居住地は、徳之島町71.4%、天城町28.6%であった⁴⁾。

現職がある人は71.4%で、複数回答があったのは介護職の2名、他は店員、調理職などであった。初来日は、90年代が最も多く7名であり、2000年代3名、それ以降2名、80年代は2名であった。仕事で来日した人の88.9%はエンターテイナーとして就労していた。

徳之島では、宮古島と同様に、2000年以降も細々とであるがフィリピン人の移住が続いている。その背景には、姉が先に地元男性と結婚していて、その縁で妹が結婚移民に来るなどの、フィリピン女性どうしの紹介結婚を通じたチェーン・マイグレーションがある。それに対して、石垣島では、フィリピン女性が沖縄本島や県外への転出によって減少し、新規の移住者はほぼ来ることがなく、フィリピン人の人数は漸減している。

2. 徳之島のフィリピン女性たちの集い方

石垣島、宮古島と比べると、徳之島のフィリピン女性たちは、フォーマルなものもインフォーマルなものも、メンバーと非メンバーの境界が明確なグループをほとんど編んでいない。フィリピン女性たちは、友だちやその子どもの誕生日に集って祝いあい、時折は声かけをする女性の発案でバーベキューなどを楽しんでいるが、それらの集まりは、グループとしての名称、明確なリーダーシップとメンバーシップ、定期的な集いや、娯楽・親睦以外の活動内容を持たない。集まりを持とうと声をかける女性は、徳之島全体に対して声かけをする女性、Aさんがひとりいて、彼女の声かけによって、多い時には5、60名が集まってくる。他に、近所のフィリピン女性どうし、または親しい友人どうしが集うときに声をかける女性が数名いる。

徳之島の天城町で、町のイニシアティブのもとでフィリピン村が設立され、毎年、そこでイベントが行われていた1990年代には、フィリピン女性たちはダンスを披露していた（語り①）。フィリピン村は、フィリピン結婚移民のための施設というわけではなく、天城町がフィリピンとの交流を積極的に行っていた時代に⁵⁾、交流拠点として設けられたものである。

フィリピン村がなくなった後も、7、8名のフィリピン女性たちがダンスを披露する機会が何度かはあった。5、6年前に、Aさんがフィリピンで衣装を誂え、それを着て徳之島祭りのパレードなどで練り歩いたり踊ったりしたという（語り②）。しかし、このダンスの集いは、グループ名、固定的なメンバー、定期的な集まりをもたなかったようである。披露する機会があり、外部から依頼があればAさんが声をかけ、集まれる人が集まってきた。現在は、祭りのパレードに出ることはあるが、本格的なダンス活動は休止している。カトリック信仰については、個人として地域の教会の日曜礼拝に通っている人はいるが、

フィリピン信徒としてのグループや集いは存在しない。ただし、徳之島のカトリック教会に新しい神父が赴任した折には、Aさんが声をかけてみんなで教会へ出向き、地元信徒たちとともに歓迎するという。

他に、徳之島にいるフィリピン女性たちが複数名で何かの場や行動を共にする状況として、介護と農業という仕事が挙げられる。介護については、本特集の高畑原稿が中心的に扱っている。ネットワークという視点でいえば、介護資格取得のための研修にフィリピン女性たちが複数で参加し、そこにAさんの声かけがあったのは事実であるが、介護職に就くフィリピン女性たちの組織化にはつながらなかった。複数のフィリピン女性たちが働く施設は存在するが、規模は数名程度であり、フィリピン女性たちのグループは組織化されていない。

農業については、ジャガイモやドラゴンフルーツの収穫を行う繁忙期に、日給で働く臨時のアルバイトとして、フィリピン女性たちが何人かで農家をまわることがあった。定職は介護職であり、農業の繁忙期にアルバイトをしてきたフィリピン女性、Bさんは、知り合いのフィリピン女性たちに声をかけて人を集め、人手を要している農家につないだことがある（語り③）。フィリピン女性たちは、「手が早くて仕事がいねいなので取り合い」であったが、現在は定職でフルタイム勤務をする人が多く、アルバイトをしたい人があまりいないことから、Bさんはもう農家への紹介をしていない。

徳之島のフィリピン女性たちは、必要性に応じて、また親密さを介して、緩やかにつながり、集っている。目的や活動内容、明確なメンバーシップのあるグループは、ほぼ皆無であった。

グループとリーダーが不在であること背景として、石垣島と宮古島に見いだせるような、カトリック教会のシスターによるフィリピン信徒たちの組織化や、中核的な地元信徒によるフィリピン信徒たちのサポートなど、外部、とくにカトリック関係者からの積極的な組織化の働きかけが、徳之島ではあまり見いだせないことが挙げられる。視点を変えて言えば、徳之島のケースは、カトリック教会関係者などの外部からの組織的な支援や働きかけがない状態で、フィリピン女性たちが自発的にどのように集い、親しみ合うのかを表していると言えるだろう。

徳之島においては、フィリピン女性たち相互の親密さ、パーソナルな親密圏における親睦が、ネットワークにおいて大きな比重を占めている。そこに、いざという時の相互扶助の機能が位置づいていることは興味深い。

前述のBさんは、フィリピンの家族が急病になった時、フェイスブックに「フィリピンに帰りたけれどお金がなくて帰れない。助けて。」と、窮状を伝える投稿をした。その後、たくさんのフィリピン女性たちが彼女にお金を渡しにきたという（語り④）。Aさんによ

れば、フェイスブックを使ってみんなに困っていることを伝えたのはBさんだけであるが、親しい友人どうしでのお金のやりとりを含む助け合いは珍しいことではないという（語り⑤）。徳之島のフィリピン女性たちの、緩やかにつながり、親密さによって集うネットワークが、必要に応じて相互扶助の機能を発揮することを、この語りは示している。

3. 徳之島のフィリピン女性におけるリーダーシップ

フィリピン女性たちが集う場面でよく声かけをするAさんは、徳之島のフィリピン女性たち、また、地域の住民たちによって、フィリピン女性のリーダー格と目されている人である。

しかし、フィリピン人のグループが存在しない徳之島で、Aさんは何の代表でもなく、フィリピン人全員を束ねて何らかの団体行動へと導くこともしない。むしろAさんは、自分を「リーダーではない」とした上で（語り⑥）、「声をかける」、そして「やってみせる」という二つのアクションによって、徳之島のフィリピン女性たちの緩やかでフレキシブルなネットワークを支えているように思われる。

「声をかける」きっかけは、ひとつには外部からの依頼である。カトリック教会から新任の神父の到着が伝えられると、Aさんは「みんな（教会に）行こう」と声をかける。筆者らの共同研究グループが徳之島を訪れ、フィリピン女性たちに会いたい、アンケート調査をしたいと伝えた時も、Aさんがバーベキューをしようと声かけをして、フィリピン女性たちを集めてくれた。地域の祭りのパレードで参加者が少ない時も、Aさんは依頼を受けて人を募っている。

しかし、Aさんにとって「声かけ」は、きっかけが外部からの依頼であっても、きわめて能動的なアクションとして実践されている。Aさんは、自身がほとんど個人的に口をきいたことがない新参者の若いフィリピン女性を、「車がなければ私が連れていくから行こうよ」と言って誘っている（語り⑦）。集まることが、フィリピン人どうしの縁をつなぎ、孤立に陥らないために重要であることをよく理解した上での働きかけであるように思われる。フィリピン女性たちに一斉メールで集まりのお知らせをしたあと、「行きます」と返事をした人たちには、ひとりひとりに電話をする。場合によっては数十人に、Aさんひとりが電話をしているのである（語り⑧）。

もうひとつ、Aさんが行っているアクションは「やってみせる」である。最も重要なものは、介護2級の資格取得の研修を、第一期生として受講し、合格してみせたことであっただろう。このときは、「声をかける」「やってみせる」が同時に行われ、一緒に第一期生となったフィリピン女性たちがAさんの他に6人いたのだが、多くのフィリピン女性たちは日本語の壁にたじろいで様子見をした。Aさんたちの資格取得によって、自分にもで

きるかもしれないと感じたフィリピン女性たちが後に続いたのである。この他にも、Aさんは、娘が医療系専門職として働くようになってからは、周りの友人たちに、子どもの進路選択のひとつとして、その仕事を勧めているという（語り⑨）。それは、子育て中のフィリピン女性たちの懸念や希望をよく知っている、同じ母親としての助言である。

Aさんは、フィリピン女性の友達から悩みごとが寄せられれば応じるのだが、そこでもリーダー的な目線ではなく、「私もそうだから」という同輩の立場で話をしているように思われる（語り⑩）。

Ⅲ. 結びに代えて——島嶼のフィリピン女性たち

徳之島のフィリピン女性たちには、グループらしいグループが存在しない集い方、正式なリーダーがいないまま発揮されるリーダーシップが見いだせる。徳之島では、宮古島、石垣島よりも、フィリピン女性たちの組織化が進んでいない。そのひとつの背景として、外部、とくにカトリック関係者からの、フィリピン信徒たちを焦点化した働きかけや支援があまり行われてこなかったことが挙げられる。島嶼のフィリピン女性たちのネットワークについて考察するとき、徳之島の事例はきわめて示唆的である。

島嶼は、その面積、人口規模や架橋の有無も影響するが、基本的には海で囲まれ、明確な境界線をもって、地理的に外部から孤立している。それに伴って、若年人口の流出、経済的な沈滞が常態化している場合もある。島嶼に定住している人たちは、限られた社会関係や資源の中で生きていくことになる。例えば、フィリピン女性が、家族関係、離婚や子育てなどについて、専門的な支援団体に助けを求めるという状況は、離島においては成立しにくい。石垣島、宮古島と徳之島において、行政や市民団体における、フィリピン女性たちに着目した「共生」、「支援」の文脈というものはほぼ不在である。

そのような外部からの「共生」「支援」の働きかけ、専門家や関連団体などの人的・社会的資源が乏しい離島において、カトリック教会関係者によるフィリピン女性たちの組織化やサポートがきわめて大きな意味をもっていることが、石垣島と宮古島では観察できた。これに対して、カトリック教会からさえもフィリピン信徒を焦点化した支援をあまり受けてこなかった徳之島は、外部からの働きかけがほぼ欠落している状態で、フィリピン女性たちがどのように集うのかを表す事例であると考えられる。

徳之島で見出されたのは、フィリピン女性たちが自発的に織りなしてきた、緩やかでフレキシブルなネットワークとリーダーシップであった。合議によるリーダーの選出は行われないが、みんなに声かけをして、新参者が孤立していないかを気にかけている女性はいる。親密性によって緩やかに集っているが、いざという時にはフィリピン・ネットワークが相互扶助の機能も果たす。外部からの「共生」「支援」の文脈がないことで、自発的に

編まれてきたネットワークの豊かなフレキシビリティ、そこで発揮されてきた島嶼のフィリピン女性ならではの能動性ともいうべきものが、鮮やかに見いだせるのである。

【徳之島調査 語りの記述】⁶⁾

語り①

——フィリピンコミュニティというのはあるの？昔はあったけどなくなった？

A：なんか前はフィリピン村があって、みんなを集めて踊ったり、今はもうあちはなくなっているから、そのときにもうバラバラになっているでしょう。（嫁に来た頃は）まだフィリピン村、ありました。4回くらい、行ったんですよ。バンブーダンスとか。たまに私もこっちのパレード、「おいでおいで」、ほんとは（地区の住民ではないので）ダメだったんだけど、でも私が「おいでおいで」、たまに。

——あの衣装を着て。

A：そうそう。人数が足りないから、Aちゃん、お友達、いないかね？はい、声、かけます。そんな感じ。

語り②

B:Aさんが5、6年前、フィリピンで揃いのドレスをみつらえてきたのがある。少しだけみんなで練習して、知り合いの結婚式や祭りの時とか、頼まれた時に踊っていたけど、今はみんな忙しいから。Aさんだけ、鹿児島のお祭りでフィリピン人のグループがダンスをするときにこれを着て行ったことがあるんじゃないかと思う。他の人たちは島外に行ったことはない。

——このダンスをするグループに、名前がついているの？

B:名前はない。

——決まった練習日とか、この時にいつも集まろうという時間はあった？

B:それもなかった。ダンスは、フィリピンの、ろうそくを灯して踊る踊りやバンブーダンスとか、いくつか。フィリピン人はエンターテイナーだったから、ちょっと練習したらなんでもできる。

語り③

B:3、4年前まで、私がそれ（フィリピン人を集めて農家に紹介すること）をした。友達に声をかけて、働きたい人を集めて農家にジャガイモの（収穫の）仕事ができる人を紹介して。

——それ、コミッションをもらったの？

B:もらわない、もらわない。仕事したいフィリピン人の助けになればと思ってやった。

——紹介する農家は、フィリピン人のお嫁さんがいる農家？

B:そういうのも、そうでない農家もあった。あまり関係ない。でも今は、みんな仕事（定職、フルタイムの仕事）があるから、やりたい人が少ないから、もうしない。

——じゃあ、フィリピン人がジャガイモ掘りに来なくなった農家は大変になっている？

B:フィリピン人は、手が早くてていねいだから、その頃も取り合いだったよ。今も来てほしいところはあるかもしれないけど、行きたい人がいない。

語り④

——みんな、誕生日会とかで集まる以外に何かする？困った時の助け合いもあるの？

B:フィリピン人は、助け合うよ。(私は)フィリピンの家族が急に病気になったとき、もう、すぐにフィリピンに帰りたい、でもお金がない。それをフェイスブックに載せたら、みんながお金をもって来てくれて、それでフィリピンに帰れた。ありがたかった。

語り⑤

A:Bさんは、「助けてちょうだい」とフェイスブックで言っていた。だから、いいですよ、ってなった。助けてと言う人がいたら、みんなが助ける。(お金を)あげたよとは他の誰にも言わない。Bさんが「私、お金がないからフィリピンに帰れない、助けて」と言ったから、みんなで助けた。普通は(フェイスブックでみんなに)助けてと言わない。本当に親しい人が助ける。助けた人は他の人には言わない。言ったらいけないでしょう、そんなこと。

語り⑥

——今日は、2010年の介護のセミナーの話とか、あと、Aさんがフィリピン人のコミュニティーのリーダーだから、そのお話を、

A:ないない、そんなのは、リーダーとかはいないでしょう。

語り⑦

——(皆さんのつながりは)もともと同じお店で働いていた、みたいな？

A:いや違います、みんな、バラバラ(別の店で働いていた)。さっき(バーベキューの場に)いた子も、私、ひっぱったんです、Cさん、別の集落だけど、私の(集落の)パレード、来ない？来ます来ます、って言ったから、昨日、私たち、練習しました。いつ来たかな、あのCさん。

た:去年の12月かな。

え:そうですね。でも会ったのは最近ですよ。(Cさんの)お姉さんはもともと徳之島にいるから、うちの妹、結婚するから来ませんか(私を結婚式に)呼んで、そこで(C

さんに初めて) 会って。次は誰かの誕生日で会って、元気？(CさんはAさんに) 全然、挨拶しなかった、けど、それは別にいい。バーベキューもおいでねって私が電話した。車がない。いいよ、私が連れていくから。昨日は(口をきいて) 二回目。誕生日の時はひとこと、ふたことだけ。次の時はスーパーとかで会ったら元気？とか。

語り⑧

——どうやってフィリピン人の皆さんに連絡しているの？

A：たまにフェイスブックやってるんだけど、電話します。

——ものすごい数の人に

A：しますします。最初はメールで、そこでは一いと言ったら、電話します。は一いと言わない人は、やっぱり忙しいんだね。メールは来て、忙しいから行けない、OK、そういうときは電話しない。でも行きますと言ったら、電話します。電話の方がめんどろでない。行こうよ。しばらく会ってないし。そんな感じ。

語り⑨

——この仕事(Aさんの娘さんが就いた医療系専門職)、仕事の口がどこでもありそうで、いいですね。

A：だからいつも友達に言っている。どこにでも病院はあるから、島に帰っても病院はあるから。

語り⑩

——フィリピン人の友達から相談されたら、なんて言うの？

A：「あんたがうるさくなかったら旦那も手を出さないんじゃないの？」それは、私もうるさいから(笑)。わからんけど。あんたがうるさくなかったらやらないんじゃないかって、いつも言っている。

【付記】調査に協力くださったフィリピン女性の皆さん、ご協力を下さった徳之島町、伊仙町役場の皆さん、関係者の皆さんに深謝します。

注

- 1) 本稿は、科学研究費基盤研究(C)2016～2018年度「島嶼への結婚移住をめぐる比較研究——フィリピン人を中心に」(研究代表者 野入直美) 課題番号16K04073の成果である。
- 2) 石垣島と宮古島における調査結果は、「沖縄・先島諸島で暮らすフィリピン人女性たち

の生活世界——ネットワーク, リーダーシップと次世代継承を中心に」沖縄移民研究センター『移民研究』11号, 2016年, 7-36頁に掲載している。

- 3) 本稿で用いる島嶼のフィリピン人人口統計は, 「市区町村別国籍・地域別在留外国人 2017年12月」e-Stat17-12-07による。 <https://www.e-stat.go.jp/>(情報取得2018年8月16日)
- 4) アンケートを実施した日, 伊仙町ではひとりのフィリピン女性の誕生日会が催されており, 伊仙町のフィリピン女性たちはアンケートを行ったバーベキューの集いには来なかった。
- 5) 1990年に徳之島の天城町とフィリピン, ネグロス島のシライ市はさとうきび産業を契機として姉妹盟約を締結し, その後の数年間は相互の訪問などを含む活発な交流が行われた。交流のシンボルとなった「フィリピン祭り」は, 1994年から1998年まで行われていた。田島康弘「大島郡天城町における日比交流について」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』51巻, 2000年, pp.49-71。
- 6) 本稿で用いている語りは, 2018年8月5日にAさんを, 高畑, 矢元, 筆者がインタビュアーとなって行った調査で得られたものである。同8月4日, 8月7日に, 筆者がBさんをインタビューした。使用言語はいずれも日本語である。音声は許可を得た上で録音し, 必要な箇所を文字起こしして用いている。

(のいり なおみ・琉球大学人文社会学部准教授・社会学)

Network and Leadership of Pilipino Women in Islands: Comparative Study of Tokuknoshima, Miyako and Ishigaki Islands

NOIRI Naomi

University of the Ryukyus

Key words : Pilipino women, Islands, Tokunoshima, Okinawa, Network